

すると、私はずつと向うの反対の側に在る建物の中で、不意に窓が明るくなるのを認めた。その光りは、動いた、そこでは、誰かが光りを持つて歩いてゐるのであつた。私に向つて次第に近く、次第に近く、それらの窓は段々に照らされてきた……今私は、その前に私が立つてゐる所の閉された戸の方へ来なければならぬ様に通じてゐる廊下を通りながら一の姿が歩いてくるのを認めた……私の心は、一の力強い大きな歡びで一杯になつた——それでは彼等は矢張り、私を忘れたのではなかつたのだ、彼等は、私を連れにそれでも終にやつて来たのだ……

世の終りの公審判の日に、その墓の中に寝てゐて、その最も深い絶望に満ちた良心の底に於て總てを諦めて終はうとしてゐたその時に——不意に、それもあゝ何といふ溢れる様な歡呼を以つてであらう、天國の鐘が、彼をも亦呼び始めることを、それが優しく、許す様な調子で「來れ、汝も亦、來れ、汝も亦！」と唱ひ、且つ歡呼するのを聴く者は、きつとこんな感がするに相違ない。

不意に私は、戸を叩く音をきいた、私は閉ぢられた戸の中に、鍵がちやちやいふ音をきいた、門の角材が上げられた……さうして、そこには闖の上に、小さな、微笑した、光る眼鏡を掛

た親切さうな神父サミュエルが立つてゐた……

「もう遅くはありませんか？」と私は寢床の上に起き上つて、急いで訊ねた。

「決して」と佛蘭西人の神父は、私の急いだ聲の調子にいくらか驚いて答へた。「まだ充分に時間があります、早朝の祈禱はまだやつと終つたか終らないかです、それから、私たちは、*Te Deum* (讚榮唱とも譯すべきか) を祈ります、その後で、やつと行列が始まるのです。」

「まだ充分に時間があります」——彼の言葉は和げる様に私の上に落ちてきた。私は、たゞすつかり着物をきたまゝ寢床の上に横つてゐたので、私が修道院の中を駆け廻つたあの恐いことは皆な夢であつたことを悟つた。私は長い暗い廊下を通つて、靜かに彼の後について行つた。一の高い鐵で、覆はれた扉の所へ來た時に、彼は蠟燭を吹き消した、それから、彼は戸を開いた、私たちは聽堂の中へ入つた。

その高い灰色の圓天井は、上の方で闇の中へ消えてゐた、さうして、その空氣は、私が思はず慄へた位に、寒かつた。主たる祭壇の背後では、聖堂の最奥部が無数の蠟燭に照らされて、明

るく輝いてゐた、さうして、聖務日課書による祈禱は讚美歌の様に調子の調つた合唱となつて、いつもの様に誦せられた。私は暫くの間、それを聴いてゐた、彼等は讚美唱を唱ひ始めた。私はベネディクテ (Benedicite) の歌を知つてゐる、それはバビロンの暴君が、彼等をおの中に投げ入れた燃えさかる爐の火焰の中で、三人の若いヘブライ人が唱ひ、且つ今日に於ても尙ほ、數千又數萬のカトリックの聖堂の中で毎朝響いて來る讚美の歌である……さうして私の不安も、私の心配も、私の恐怖も、全能なる神に對するこの絶えずつゞいて繰りかへさるゝ讚美の歌の中で鎮められて終つた……

「主を讀へよ、主の總ての御業よ、主を永遠に稱めたゝへよ！」

「主を讀へよ、主の總ての天使よ、主を讀へよ、總ての天よ！」

「主を讀へよ、天の下に在る總ての水よ、主を讀へよ、主の總ての力よ！」

「主を讀へよ、日と月よ、主を讀へよ、天の星よ！」

「主を讀へよ、總ての雨と露よ、主を讀へよ、主の總ての靈よ！」

「主を讀へよ、火と熱よ、主を讀へよ、寒さと暑さよ！」

「主を讀へよ、氷と雪よ、主を讀へよ、夜と日よ！」

「主を讀へよ、光りと闇よ、主を讀へよ、雲と電光よ！」

「地よ、主を讀へよ、永遠に主を稱めたゝへよ！」

「主を讀へよ、山と丘よ、主を讀へよ、總て地上に綠なすものよ！」

「主を讀へよ、總ての泉よ、主を讀へよ、總ての海と河よ！」

「主を讀へよ、水に在る總ての生物よ、主を讀へよ、天の總ての鳥よ！」

「主を讀へよ、地の獸よ、主を讀へよ、總ての人の子よ！」

「イスラエルよ、主を讀へよ、永遠に主を稱めたゝへよ！」

「主を讀へよ、主の司祭等よ、主を讀へよ、主の僕よ！」

「主を讀へよ、正しき者の總ての魂よ、主を讀へよ、總て心の聖く且つ謙れる者よ！」

「アナニアよ、アヅァリアよ、ミザエルよ、主を讀へよ、永遠に主を稱めたゝへよ！」

「我等をして、聖父と聖子とを、聖靈を以つて讀へしめよ、我等をして、永遠にそれを讀へしめよ！」

「汝は讃へられ給ふ、主よ、天の高き處にて、而して永遠に稱められ、榮えまし、高く擡んで給へり！」

ベネディシテの歌の後に、それと同じ様に莊重な、他の多くの讚美の歌が唱はれた——「天の主を讃へよ、高き處にて主を讃へよ！」（詩篇第四百四十八篇）——「主に新しき歌を唱へよ！」（詩篇第四百四十九篇）それから最後に聖福音書（路加第一章第六十八節—第七十九節）のザカリアの讚美の歌である *Benedictus*（祝すべき哉）が唱はれた。その最後の行は、次の如くに唱はれてゐる——「暗黒及び死の陰に坐せる人々を照らし、我等の足を平安の道に導かんとし給ふ。」

やがて一人の修道士が、燃えてゐる提燈を持つて合唱座から出てきて、中央の間を通つて行つて聖堂の扉をすつかり廣く明け放した。さうして今や行列は、それがそこで組織せられた主たる祭壇の背後の場所から、靜かに出て來た——高い棒の上についた二つの提燈と、フランチェスコ會の十字架と、それから一の長い列をなして二人づゝ歩く褐色の服をきた修道士たちの群れが。私はその人数を計へてみた、彼等は全體で三十七人居つた。私は行列に加つた。先頭の一人が、詩篇の第五十篇を誦へ始めた……



十五 アルズルナの山の *Sasso spico* の階段



(Chiesa maggiore) 堂聖大の院道修の山のナルズルア 六十

Miserere mei, Deus, secundum magnam misericordiam tuam (おゝ神よ、汝のいと大なる憐みによりて我を憐み給へ)

さうして多くの力強い籠つた聲が、それに答へた……

Et secundum multitudinem miserationem tuarum dele iniquitatem meam. (而して汝の憐みの満ち溢るゝに依りて、我が不正を除き給へ。)

今や私たちは、聖堂の扉に達した——無限の夜が、灰色の霧の深い夜と、荒寥たる寂しさが、外に私たちを窺つてゐた……空気は氷の様に冷たく、私たちに吹き込んできた、霧は、丸で水蒸気のように、提燈の光りの中で漂つてゐた……

けれど私たちは、夜を冒して右に曲つてから、屋根のある廊下の方に進んで行つた。褐色の服の修道士たちの長い列は、急がしげに私の傍を通り過ぎた、さうしてその多くの影は、高い、冷たい壁にひらめいてゐた。

Miserere の歌は終つた、やうして De profundis (「深き淵より」といふ死者の爲めの祈禱) が響き始めた……「主よ、我れ深き淵より主に叫び奉れり」……さうして今や私たちは、廊下の

右の方に在る一の格子の戸の所へ来た、私たちは、二三步下へ降つた、さうして、聖痕の禮拜堂の前室に入った。禮拜堂の戸の入口の所で、誰かが私に一の祈禱臺を押し寄せて呉れた。聖堂の中では修道士たちは既に壁に添うた合唱座の椅子に座を占めてゐた、さうして今や祭壇の階にも跪いてゐた。彼等の上部には、一の白と青との祭壇の像が、デッラ・ロッピア (Della Robbia) の一人の十字架に釘づけられ給ひし基督の像が、懸つてゐた……

禮拜堂の中での祈禱は、短かかつた。やがて、私が待つてゐた對唱が、歌はれて響いてきた、それから、一の靜かな祈禱が続いた。その後で一の連禱が誦へられた、總てのものが、その身體を祭壇の前へ長く投げかけて、床の上に臥した、さうして床を接吻した。その後で、私たちは大聖堂へ歸つて行つた。連禱が終つた頃に、神父サミュエルがやつて来て、私を外へ連れ出した。然し戸が私の後ろに縮ると、私は聖堂の中に異様な物音のするのを聞いた——それは、修道士たちが身體を鞭うつてゐるのであつた。佛蘭西人の神父は、私の室の戸の所で親しげに「お休み」といつて、それから姿を消して終つた。それはもう二時に近かつた。私は再び寢床に入つて、八時前までは眼が醒めなかつた。

私が眠つてゐた間に、一の光り輝く様な春の朝が、アルゼルナの山の上に明けてきた。聖堂と修道院との前に在る小さい廣場から、私は遠く、一の廣漠たる驚異すべき風景を遠く眺めやつた。

胸壁の縁から、人は濕つた巖の一の深谿を瞰下することが出来る。さうしてこの巖の下の方に、深い深い所に、巨大な、方々に散らばつた巖の塊と裸のポプラの樹とを有つた、緑の野が展がつてゐた——それは昨日篠つく雨の中を私がラ・メルナの山へ向つて登つてきたあの野である。私は、その下の方に在る歩いてきた道を再び見出した。

けれど、今度は眼を上げて眺めると、その周囲の全風景の中には只だ山より外に、何も見るものはなかつた。それらの山は、近くでは黄褐色を帯びて居り、もつと遠くなると紫色になつて、褐色と黒と緑との斑點があつた。色々な色の波で固められた海の様には、山々の頂はあらゆる方から聳え立つて、地平線の青い線をくつきり劃してゐた。ずつと深い下の遠い所には、ビッピエナが横つてゐた、さうして、私が昨日こゝへ登つてくる道で彷徨ひ歩いた山々は、只だ小さな丘の様にししか見えなかつた。その眺望は無限の空の下で無限に擴がつてゐた。

今日は日曜日なので、附近の農夫や、農夫の妻たちはミサ聖祭に與るために、聖堂へ集つてきた。私は、廣場の周圍に圓く集つて、低い聲で話をしてゐる正直さうな巡禮者たちや、頬の赤い女たちや、微笑んでゐる子供たちをみとめた。誰も、外國人の所へ乞食する爲めにやつて來るものはなかつた、然し一人の年とつた女が、話をする爲めに私の所へやつてきた。彼女は、アベニイニ山脈の向う側のエムボオリとシエナとキウジとの間の鐵道に添つた或る遠い市のカステル・フィオレンティノから來てゐるのである。「本當にこの山の上で聖フランチェスコ様は、大變に痛悔をなさり、大變にお苦しみになりました。だから私たちも聖人と一緒に天國へ入らうと思ふならば、苦しみをなし又痛悔をしなければ (far' asinenza) なりません」と彼女がいつた。

そこへ神父サミュエルがやつて來た——彼はいつもの様に、行列の後では再びもう寢床に入らなかつたにも拘らず、生き生きした顔つきをしてゐた——さうして彼に伴はれて今、私は聖フランチェスコの記念がそれに結びついてゐる多くの場所を訪ねた——彼が祈禱をした洞窟や、彼が寢た他の洞窟や、聖痕の禮拜堂や、それから最後には、山の高い所に在つて兄弟レオネが彼の師にして精神上的の父たる聖人にミサ聖祭を読むのを憤ひとしてゐた巖窟などを、私たちは訪ねた。

小さい廣場から私たちは最初に、丁度修道院の下になつてゐる巨大な巖の塊の間の澤山の狭い階段を下へ降りた。そこは、非常に濕氣があつた、私たちが歩いて行く階段は、滑りやすかつた、さうして、水は西側の石を覆うてゐる緑色の羊齒から、滴り落ちてゐた。終に私たちは、一の眞の深い淵の底に達した——私たちの頭の上には、高く濕つた巖の壁が立つてゐた、さうして、すつと深い下の巖の間には、深い穴が廊下の下から聖痕の禮拜堂へ、又そこからさらに先の方へと山の中に穿たれてゐた。こゝの下のこれらの巖壁の間には、永久の薄明が支配してゐた、さうして、水は絶えず苔と茂つた羊齒との上を流れ滴つてゐた。そここゝに、巖の割目には、小さいとねりこの樹が生えてゐた。

この下の深い暗い所に、聖フランチェスコは停つてゐたのだ。一の巨大な、突立つた巖塊の下で——それは *Sizzo* (巖) 又は *Masso spico* (巖塊) と呼ばれてゐる——彼は祈るのを常とした、さうして、巖穴のもつと深い所に、彼の寢所の窟があつた。「私たちは後でそれを、聖痕の禮拜堂の下の廊下から見ませう」と神父サミュエルがいつた。

暫くの間、私たちは全くちつとして、その温氣のある深い淵の中に留つてゐた。「まあ思つても御覽なさい——幾日も幾日も、幾週間も幾週間もこゝに住み、こゝに祈り、こゝに留つてゐるといふことを——さうして屢々昨日の様な天氣の時にこゝに留つてゐるといふことを——」

「さうです」と神父サミュエルが私に答へた、「ラ・エルナの上の氣候は、一年の大部分は非常に冬の様です。私たちは三ヶ月か、高々四ヶ月の夏を有つてゐるだけです、その他は、雪と、暴風と、雨と、霧とです。私はアシシシから訪ねて来た人々から、彼等がそこで見た總てのものはアルゼルナの山に比べると色を失つて何もないものになつて終ふといふことを聴きました……アシシシは、美しく、愛すべきで、人の心に訴へるものがあります、それはフランチェスコ運動の最も花を開いてゐる所です。然し、こゝでは、人はその深い根を、その底からそれが神に向つて呼びかける所の、その深い淵を見ることが出来ません。さうして、こゝでは只だ一つのことだけが、いはれます——それは眞に恐ろしいことです……さうです、本當に恐ろしいことです (effrayant……)」と神父サミュエルが繰り返していつた……

他の階段から、私たちは再び明るい所へ出た。聖痕の禮拜堂へ行く廊下で、私の案内者は小さ

い一の戸を開いた。私たちは、再び廣い所へ出てきた。それは私たちがたつた今訪ねたばかりの同じ深い淵の上に當る部分であつた。然しそこには、光りがもつと澤山あつた、巨大な巖塊は、花や叢を以つて豊かに覆はれてゐた。けれどこの光りの所から出ると間もなく、一の狭い暗い廊下を私たちは通つて行つた、その天井は、人がすつかり屈んで歩かなければならない位に、低くかゝつてゐた。さうして、その廊下は、四方が閉ざされてゐる一の巖窟の中で終つてゐた、こゝで、聖フランチェスコは、その寢所を有つてゐたのである。或る巖の塊の下の一枚の巖の板が、彼の爲めに寢床と、その覆ひ物となつたのである。これは、殆んど人間的とはいひ難い位である——何故ならば、その窟洞は非常に暗澹として居り、巖は非常に濕つて居り、且つ光りと空氣とに對しては、只だ細い廊下が通じてゐるばかりであつたから。こゝに於ては、人は超人間的なるものに、たゞそれに對して個々の選ばれたるものと特に召されたる者のみが堪へ得るに過ぎない所のものに、直面してゐるのである……

「私たち普通の基督信者である者には、却つてこゝの様な場所のことなら、尙ほよく解るので」と神父サミュエルは、私たちがそれから間もなく上の山の中腹の高い所で、兄弟レオネの明

け開いた、明るい空気の流通のいゝ洞窟の中に立つた時に、私に向つていつた。狭い階段のいくらかが、大きな巖塊の間を通つて、その上まで導いて行く、さうしてその深い所には、一の小さい祭壇が設けられてゐた——その祭壇の前には僅かにやつと一人の司祭に對する場所だけしかなかった……

「ミサ聖祭を捧げる爲めには、何といふ場所でせう！」と神父サミュエルが叫んだ。——「まあ考へて御覽なさい、兄弟レオネと聖フランチェスコとが、こゝでお互に過した朝のことを——一人は祭壇の前に真直ぐに立ち、他の一人はその足許に跪いてゐるのを……下の深い谷の中の朝の紫色の霧の下には、まだ眠つてゐる世界が在り、こゝの高い山の上では、朝の静けさと朝の爽かさの中に於て、その際に聖き聖體と聖き聖爵との中に於て神が自らを私たちの爲めに表はし給ふ所の、驚嘆すべき行ひがなされるのです……さうして聖フランチェスコは、こゝで高く地と總ての地上的なるものから離れて、兄弟レオネの手に高く捧げられた主の御體と、輝く黄金の聖爵の中の主の御血との外には、何ものをも見ず、何ものをも知らず、又何ものをも知らうと欲しなかつた時に、何んといふ歡喜の中に浸り漂つたことでせう……」

「私自身も嘗てこゝの上で、ミサを読んだことがあります」と、神父サミュエルは、私がまだ彼に問ひかけなかつた間に答へるかの様に、語りつゞけた。——「それは或る夏の朝で、丁度まだ太陽の登らうとしてゐる時でした。私がミサを始めようとして十字架の記號をした時に、太陽は向うの山の上から、モンテ・カゼッラ (Monte Casella) の山から赤く輝き出しました。さうして、私が Dominus vobiscum (主と共に在す) を誦するために振向いた時に——朝の霧と、朝の太陽との中に浸つて、何といふ壯大な景色が、私の眼の下に展がつてゐたことでせう……私は、彼の名を口にするのを殆んど敢てしなかつた位にも、神の偉大さに依つて、捉へられて終ひました、さうして、私がミサ聖祭に於て Dominus (主) 又は Deus (神) といふ言葉をいはなければならぬ時には、私はいつもシナイの山の前に於けるイスラエルの様に躊躇し、且つ恐れに捉はれました、さうして、モオゼが燃える柴の前でその穿きものを脱いだ様に、總ての世間的なる考へをば、私の魂から取り去つて終ひました……眞にこゝは、Sursum corda (汝の心を上に擧げよ) を唱ふべき場所です……」

「さうです」と私たちが降り始めた時に、彼は尙ほ語りつゞけた——「人はラ・エルナの山を、

フランチェスコ會のゴルゴタと呼んでゐますが、それは正しいことです、何故ならば、主の十字架に釘づけられ給うたことは、この山で奇蹟的な方法に依つてフランチェスコの身體に繰りかへして行はれたからです。人はこの山を又、タポオルの山とも、變容の山とも名づけることが出来ます、何故ならば、確かにフランチェスコは、アルゼルナの山の上に於けるこの寂しい祈りの時より以上に天に近く達したことは、嘗て決してなかつたからです……さうして、私たち他の憐れな小さい者たちにとつては、ゴルゴタに於て彼に従うて行くよりも、タポオルに於て彼に従つて行く方が、易しいからです……

「聖フランチェスコも亦、この山をば他のすべての所よりも愛しました……彼は、まあ謂はば「所に愛着する者」とでも、いふべき種類の人でした、彼の心は、容易く根をそこに張りました、さうして、一度住んだ所に別れを告げるのは、彼に取つては何時も苦しかつたのです……けれど、他の如何なる場所に對してでも、彼が最後にそこを去つた時にアルゼルナの山に對して告げた様な、人の心を感動させる別れを告げたことは決してありませんでした……貴方はラ・エルナに於ける彼の告別を御承知ないのでですか？ あゝ、それならば、私は後でそれを貴方に讀んで上げま

せう、今日の午後にも……それは非常に美しいものです……私たちはそれを、彼の出發の記念日である毎年の九月三十日に食堂で讀みます、さうして、人がそれを幾度きいても、その度毎に、それは新たに人の心を動かします……それは丁度、聖痕の禮拜堂への夜の行列に於けると同様です。それは、人がいく度それに列つても、その度毎に人に新しい印象を與へます……

「けれど丁度今、聖痕の禮拜堂——伊太利人は略して聖痕 (Le Stimmate) といつてゐます——を訪ねることを忘れますまい……それは兄弟レオネの洞窟の眞直ぐ下の處に在ります……それは始めには、貴方も御承知の通り、一の全くかけ離れて孤立した巖の上にそれだけ一つ立つてゐたので、そこへは「小^{イソフィア}さき花」に記されてゐる様に、一つの非常に原始的な橋が渡されてゐたのでした……七十八米突の長さのある、穹窿のついてゐる今の廊下は、十六世紀の終頃に出來たものです……」

それから私たちは、小さい聖痕の禮拜堂へ入つた。祭壇の前の床の青銅の一の格子の下に、私はその奇蹟が行はれた場所を示す所の石をみとめた。以前は、そこに兄弟レオネに依つて建てられた十字架が立つてゐたのである。さうして、彼の要求に基いてバッティファツレ (Battifolle)

のシモネ伯が（一の記銘が記してゐる所によれば）千二百六十二年の八月二十日に、「天使がこの場所に於てそれに現れ、その身體をイエズス・キリストの聖痕に依つて記號つけた所の聖フランチェスコの榮えの爲めに」一の小さい聖堂を建てることを始めたのである……

この石から、私の視線は、青と白とのマヂヨリカの立派なロッキアの作の祭壇の像の上に移つた——それは、空中に飛んでゐる天使たちに囲まれた十字架に釘づけられ給うた基督で、十字架の足の許の一方の側には、マリアとフランチェスコとが、他の側にはヨハネとイエロニモとがゐる。この最後の聖人は、彼が隠修士であり、且つ確かに又、フランチェスコのラ・ゼルナの山からの出發がイエロニモの祝日たる九月三十日に行はれた所から、そこに加へられてゐるのである……

その間に然し、朝の時刻は移つてきた、さうして、歌ミサの時がせまつてきたので、私たちは大聖堂の方へ足を急がせた。今日は、丁度十字架の頌榮のための祝日が祝はれるのであつた——*Inventio Crucis*（十字架の發見）——それは、皇后エレナが紀元三百二十六年に基督の十字架をイエルサレムに於て再び發見せられた、その記念のためである……この祝日以上に、このアルエ

ルナの山によく似合ふものは少ない、さうしてオルガンの力強い諧調に合せて、大聖堂（*Chiesa maggiore*）の高い穹窿の下に、フランチェスコ會の修道士たちの歌に運ばれて、使徒の次の如き言葉が響き渡つた……

「我等の主イエズス・キリストの十字架を讀ふことは我等に適へり、その中に我等に救ひと生命と復活とあり。それに依りて我等は救はれたり、アレルヤ！」

その歌は奔流の様に流れた、オルガンは大きく唸つた、香の煙は高く立ち登つた、それらは、この寂しいアルプスの山の上に於て貧しい農夫たちの集りに對しても、羅馬の聖ペテロ大聖堂に於て毛皮のついた服をきてゐる司教參事會員に對し、又は私の故郷の丁抹のコツペンハアゲンの歸正者に對してステノ街又は聖アンスガアルに於てさうであるのと、全く同じであつた……到る處に於て、同じ祝祭、同じ莊重、同じ言語、祭壇の上に於ける同じ犠牲が行はれる……全世界を通して、私たちは同一の教會に於て跪き、且つ一にして同じき神の禮拜に與かるのである……私は正午には食堂で、「修道士となるために」（*per farsi frate*）ラ・ゼルナの山へ來て居り、且つもう間もなくその世俗の服を長い褐色の修道士の服と替へることになつてゐた一人の明るい

眼の農夫の若者と一緒に食事をした。食事の後で私は *la penna* (羽毛の意) と呼ばれてゐる修道院の背後の山に登つた、それは *エスギオ* の山と同じ高さに達してゐることでの最高の峰である。

この頂上に於ては、山は森で豊かに生ひ茂つてゐた。その最も先の端にはまだ全く裸であるけれども、今にも開かうとしてゐる赤い芽の蕾を有つた、大きな山毛櫨の樹が生えてゐた、さうしてその下の方には、青いアネモネや黄ろい色の蓮馨花や、小さい暗青色のヒヤシンスの花などがその上を覆つてゐる所の、灰色の巖が在つた。けれど、山毛櫨の樹の間には、眞直ぐな、低い幹の大きな静かな銀松の樹の森で影を濃くせられた山の深い谷が入り込んでゐた、さうして、それらの樹の間には、地面は密生した、厚い濕つた苔で柔くなつてゐた、その苔の間からそこゝに、「ぶたのまんぢゆう」が、その眞紅の花冠を突き出してゐた。暫くの間、雨になりさうに脅かしてゐた雲は、今や波状になつた山々の上に黒い霧の様にかゝつてゐた、さうして太陽は、總ての葉と草とが軽い水蒸氣を立てて居り、巖が乾いてその上に坐るのに都合のいゝ様になつてゐる位にも、夏らしく暖かつた。

この高い山の上の美しい寂しさの中で、フランチェスコ會の修道士たちが、何代も何代も、つ

づいて彷徨ひ歩き、憩ひ、談話をし、祈つてきたのである——丁度、今私が向うの森の中で修道士たちの一群が彷徨ひ歩き、憩ひ、お互に話をし、又はそのロザリオを繰つて祈つてゐるのを見るのと同じ様に……こゝで、聖ボナゼントゥラは、彼が自らその書物の序の中でいつてゐる様に、千二百五十九年の秋に彼が「その心情の平和を求めするためにアルゼルナの山へ赴き、且つそこに留つてゐる間に彼の思ひを神にまで高めた」時に、この山で「神への魂の旅」についての、彼の書物に關する思想を得たのである……さうしてこゝで、いく度かの暴風雨が今はもうそれを倒して終つた巨大な山毛櫨の樹の下で、チャコポオネ・ダ・トオディ (*Giacopone da Todi*) の友達であるデオヴンニ・ダ・フェルモ (*Giovanni da Fermo*) が祈るのを憤ひとしてゐたのである——人は今でも尙ほ「小さき花」によれば、救主が打ち碎かれて心を痛めてゐたこの兄弟に自らを現し給ひ、而も彼に何の慰めの言葉もいひ給はないで彼の傍を無關心に通ら過ぎようとなさつた時に基督の御足が踏み給うた一片の土地が、低い一の壁で圍まれてゐるのを見ることが出来る。

「兄弟デオヴンニは然し、恰も一の乳呑兒がその母に従ふ様に、又小さい子供がその父に、謙遜な弟子がその師に従ふ様に、主イエズス・キリストに従つて行つた。すると彼が主に達した時

に、主キリストは兄弟チオヅンニの方に振り向かれて、彼にその愛に満ちた御顔を示し給ひ、且つ司祭が民に振り向く時にする様に、彼の尊き御手を擴げ給うた……そこで兄弟チオヅンニは、基督の足許に身を投げ伏せて、第二のマグダレナの様はその御足を涙で濡した、さうして、彼は深い信心の心を以つて言つた——「主よ、私が罪を犯したることを御覽にならずに、貴方の御恵みの中に於て又貴方の最も聖なる御苦難の力と貴方の尊き御血の流されたことに依つて、私の魂を死者の中より醒し給ふことを！ 且つ私たちが、その心を盡し、その心ばせを盡して、貴方を愛すべきであることが貴方の御命令であり、而も何人も貴方の御助けなしにはその命令を満すことが出来ないであります故、おゝ神の愛し給ふ御子よ、私は心を盡し心ばせを盡して、貴方を愛することの出来る様に私を御助け下さることを、貴方に御願ひ致します！」處で兄弟チオヅンニが基督の御足の許に於てこの様に祈つてゐた時に、彼はその願ひを聞きとゞけられたのである、さうして慰みと平和とを見出し、且つ全くその内なる人が新たにせられた。さうして兄弟チオヅンニは、主基督に感謝し、且つ強く彼の足を接吻し始めた。それから、彼は基督をまともに見奉らうとして、起ち上つた、するとイエズス・キリストは、その最も聖き御手を接吻する爲め

に、彼の方へ差し伸された。さうして、兄弟チオヅンニがそれを接吻し終つた時に、彼は全く起ち上つて、主イエズスを抱き奉つた、さうして主イエズス・キリストも亦、彼を抱き且つ接吻し給うた。さうして兄弟チオヅンニが基督のいと聖き御胸を接吻し奉つた時に、彼はこの世の總てのよき匂ひが一に合しても、それに比ぶれば只だ一の惡臭に過ぎない様な、何ともいはれない天來の芳香を感じた。且つ主の御心からは、内と外とに向つて總てのものを照した所の、光りが輝き出でた。さうしてこの抱擁と、この芳香と、この光明の中に兄弟チオヅンニは、主イエズス・キリストの最も聖なる御心の中に沈潜して、完全に慰められ、且つ驚くべきばかりに照し明かにせられた。かくしてこの時以後、彼は神の智慧の恩恵と、言葉の恩恵とに依つて満された、さうして、主の聖き御心の泉より飲んだものの如くに、驚くべき、且つ言葉に盡し難き事柄を語つた。」

かゝる會合（一人の人間と一の神との間の會合）が行はれ、且つそこでその様な一の祈りが聽かれた場所が、一の神聖な土地として周圍を繞らされ、且つ壁と石とに依つて神聖をきづつける足から保護せらるゝといふことは、尤なことではないか？……

今や晩禱のための鐘が下の修道院から響き渡ってきた、それで、私はラゼルナの山毛櫨の樹に別れを告げた。晩禱の禮拜の後で、その日の第二回目の聖痕の禮拜堂への行列が行はれた、それには始めの行列よりも多数の参加者があつたが、夜の行列の感動すべき莊重さはなかつた。そこでは、夜の時の様に詩篇の詩は唱はれなかつた、けれども長い廊下の穹窿の下では、アルゼルナの山の讚美の爲めの聖歌が響き渡つた……

Crucis Christi mons Alvernæ

Recenset mysteria……

基督の十字架に依りてアルゼルナの山は

その奇蹟を新たにしたり……

夕方になつて私は、今朝の彼の約束——私に聖フランチェスコの告別の言葉を讀んでくれるといふ——を想ひ起させるために、神父サミュエルを探しに行つた。

「聖フランチェスコのこの告別は、その眞正なことについて、全く争ひがないといふ譯ではな

いのです。けれど、私は現在のフランチェスコの研究者の間に於ける意向は、この傳説をも亦、眞なるものとして認むることに傾いてゐると、信じてゐます」と元氣な佛蘭西人の神父がいつた。

「この告別は羊皮紙に書かれてゐて、私たちの聖遺物の中に保存されてゐます、私は私たちの神父の修道院長が出版せられたその著 *Guida della Verna* (ラ・ゼルナ案内) の中にあるその全く正確な寫しを有つてゐます、その本は澤山に説明の畫の入つたもので、修道院長はきつと貴方が出發される時に一冊下さるでせう……それは、聖フランチェスコと一緒にアルゼルナの山に居つた人々の一人である兄弟マッセオに依つて書かれたものらしいのです、さうして、次の様に書かれてゐます……

「*Pax Christi* (基督に於ける平和) 我が望みなるイエズスとマリア。

「價なき罪人にして、基督の僕、いと神の御心に適ひし人たるアシインの兄弟フラチェンスコの伴侶なる兄弟マッセオ。

「基督の旗手、我等の大なる父祖フランチェスコの兄弟と子供たちとに、平和と平安とあれ!

「フランチェスコが、千二百二十四年九月三十日の聖イエロニモの祝日に、この聖き山に最後

の別れを告げようと決心し、且つ彼がその足を聖痕に依つて傷つけられて居り釘を有つてゐるが爲めに足を地にして歩くことが出来なかつたのを理由として、キウジの伯爵たるオルランド伯が彼にそれに乗る様にと一頭の驢馬を送つてきた時、彼はいつもする慣ひの様に、サンタ・マリアの聖堂に於て朝のミサを拜聴した、さうして、その後で總ての人々を祈禱所に呼び寄せて、服従の名に於て、互に相愛しつゝ生活すべきこと、祈禱に重きを置き、修道院をよく保ち、晝も夜も神への禮拜に注意すべきことなどを命じた。彼はそれから、その聖き山全體を私たちの保護に託し、彼の總ての兄弟たちに對しては、今、現在そこに住む者にも、又後に來る者にも、その場所が冒瀆せらるゝことなく常に尊敬せらるゝ様に要求した、彼はその後でこの山に住む總ての者及びこの山に尊敬を示す總ての者に對して、彼の掩祝を與へた。さうして、その後で彼はいつた……

「この場所を尊敬しない人々は罰せらるべきである、さうして彼等は、神よりその價ある罰を蒙るべきである」と。それから彼は私に向つていつた……「兄弟マッセオよ、お前は私の修道會の中の最も善きものの中から特に神を畏敬する修道士たちに依つて茲のこの場所が住まはれること、従つて修道院長たちは、最もよき修道士たちをこゝへ送ることに努めなければならぬといふの

が、私の意向であることを知らなければならない。あゝ、あゝ、あゝ、兄弟マッセオよ——私はもう何もいはない！」

「彼は私たち兄弟アンデロ、兄弟シルズトロ、兄弟イルミナート及び兄弟マッセオに向つて、彼の聖痕の大なる奇蹟の行はれた場所を特別に守るべきことを命じ、且つそれを義務として課した。さうして彼がこのことを言ひ終つてから、彼はいつた……「さよなら、さよなら、さよなら、兄弟マッセオよ。」それから、彼は兄弟アンデロの方を向いていつた……「さよなら、さよなら、さよなら、兄弟アンデロよ。」さうして同じことを、彼は兄弟シルズトロ及び兄弟イルミナートに對していつた……「平和の中に生きよ、私のいと愛する子供たちよ。さよなら、身體では私はお前たちと別れる、けれど、私は私の心を後へ遺して行く。私は今、神の小さき小羊、兄弟レオネと一緒に出發する、さうして、私はサンタ・マリア・デリ・アンデレリへ歸つて行く、こゝへ、もう私は、再び戻つては來ない。私は出發する、さよなら、さよなら、誰も皆な。さよなら、山よ、さよなら、アルゼルナの山よ、さよなら、汝天使の山よ、さよなら、汝いと愛する、汝いと愛する山よ。兄弟鷹よ、私は、お前が私の爲めにくれた總ての親切に對して、お前に

感謝する、さよなら。それからさよなら、*Sasso spico* (巖の塊) 1°」

「汝、大なる巖よ、私は、もう二度と再び、お前を見に歸つて來ることは、ないだらう。さよなら、さよなら！ さよなら、サンタ・マリアの聖堂よ、汝、永遠なる言葉の御母に、私はこの私の子供たちをお任せします！」私たちの愛する父がこれらの言葉を述べた間に、私たちの眼は瀧の様な涙を流した、さうして、彼も亦、泣きながらそこを立つて行つた、さうして、彼は私たちの心を彼と共に持ち去つた、さうして斯かる父の去つた後に於て、私たちは孤兒の如くに殘されて終つた。

「我兄弟マッセオは、これら總てを書き記した。神、我等を祝し給へ！」

神父サミュエルは書物を置いた。短い沈黙がつづいた、その間に伊太利語の本文の“*a Dio, a Dio*” (譯者註、「神に在れ」といふ意味にて別るゝ時の挨拶の言葉)といふ繰りかへさるゝ言葉が、悲しき鐘の響の如くに、私の魂を貫いた——“*io mi parto, a Dio, a Dio tutti, a Dio Monte, a Dio Monte Alverna, a Dio Monte d'Angelli, a Dio carissimo, a Dio carissimo…… a Dio, a Dio, a Dio……*” (私は出發する、さよなら、さよなら、誰も皆な。さよなら、山よ、さよな

ら、アルゲルナの山よ、さよなら、汝、天使の山よ、さよなら、汝いと愛する、汝いと愛する山よ……さよなら、さよなら……)

「如何にこの人が愛したことでせう！」と私は思はず叫んだ。

「さうです、彼は愛しました、さうしてその愛は、終にそれが絶えず總てのものの上に注ぎ且つ全宇宙を抱かなければ何うしても満足できない位になるまで、彼が生きてゐた間中、彼の中に於て生長しました。眞理の在る所には、愛も亦、在ります、憎悪が誤謬に伴ふと同じ様に。これは、極めて單純なことなのです、それにも拘らず、人は屢々、この大なる標準を用ゐることに考へ付かないのです。今日では、その憎悪を、その誇りかな、強い、神聖な憎悪を、その火の様な、燃ゆる様な、熱い憎悪を抱いてゐる所の、そんなにも多くの人々が、宗教的な人々といはれてゐる人々さへがあるのです……然し、善良なる人間、従つて一の基督信者は、それ以上に、たつた一つの憎悪——惡に對する憎悪——のみを抱くことを、許されてゐるのです。けれど、彼はそれを、自分自らの心以外の如何なる所に、最も明白に最も善く、見出すことが出來ますか？ 其故、そこにこそ、彼の憎悪の對象が存在するのです、それは他の何處にも在るのではないのです。彼

の憎悪は、己の内部に向ふべきであつて、外部に向ふべきものではありません……」と神父サミュエルがいつた。

「私はよく知つてゐます」と夕方の薄明が小さい室房に忍び入つてきた時に、神父サミュエルはもつと低い聲で語りつゞけた——「私は、私たちの中のたゞ僅かの者のみが、この理想を完全に達し得るといふことを、よく知つてゐます……他の人々に對する憎悪を思ふまゝに發揮させることは、そんなにも都合よく、そんなにも易しく、そんなにも愉快であり、且つその際に人は他の人々よりも、「大衆」よりも自身をすつと善く、すつと貴く、すつと正しく遙かによく感ずるのです……けれど、それに反して、自らの悪い又は弱い方面に眼を注ぎ、良心の容赦なく審判する鏡に照して自己をその根柢より探り、彼自身の「我」に對する憎悪を感じ、而も彼自ら尙ほそのことから免れられないのに對して嫌厭と不快とを感ずることは、何んなに難かしく、不愉快で、又恥かしいことでせう——何故ならば、人は神から正しくこの地を耕やし、正しくこの荆棘を刈り取り、正しくこの雜草を抜き取り、正しくこの小さい土地の一片を天國の支配の下に持ち來らせることを、使命として受けてゐるからであります……大きな、見せるためにせられる所の、憎

悪を以つての他の仕事は、遙かに感謝すべきものかも知れません——けれども、それにも拘らず、自己自身といふ土地の謙遜なる耕作こそ、私たちから要求せられる唯一の仕事です、さうして、他の總ての外部的な仕事は、それらが彼の内部的にして本質的なこの仕事に奉仕し、それを助ける限りに於てのみ、善くあり、有益であるのに過ぎないのです……

「惡心に對するこの眞の憎悪からは、然し、眞正の愛が又生ずるのです——それは美しい言葉や、歐羅巴の最も賑やかな街の角に於て行はるゝ公の善業や、善き仕事に於ての一の愛ではなくして、各々の被造物と各々の運命とが、彼にとつては彼自身及び彼の生活そのものの如くその心に近くあつた所の、聖フランチェスコの心の中に於て燃えた、あの眞實の愛であります……」

「私は屢、基督教は、彼自らとなるために神が人間に與へ給うた手段ではないかと、考へることがあります……」と神父サミュエルがかたりつゞけた。「多分貴方が知つてはゐられまいと思はれる或る佛蘭西の著作者で、十七世紀に於ける私たちの最も偉大な著作者の一人たるオリエ氏 (Monsieur Olier) は次の様な深い意味の言葉を述べてゐます……「愛はその愛する所のものに變ずる」と。憎悪も然し亦、變じます。その中に愛の在る人は、基督に捉へられて、彼に在つて

變へられます。その中に憎惡の在る人は、基督に依つて斥けられ、更に益々深い憎惡に依つて満される様になります。其故、基督様が聖福音書の中で、世は彼を信じなかつた故に既に審かれてゐるといはれたことは、よく解ります。何故ならば、基督様に對する各々の人の態度の中に、その人に對する一の證據が存在し、従つて又一の審判が存在するからであります……」

「けれど mon cher Monsieur (我が愛する君よ) 私はこゝに腰かけておしやべりをして終つて、貴方がお勞れになつてゐるに違ひないといふことを考へずにゐました……どうぞお許し下さい——私は私の母國の言葉で話をする折が、非常に珍しいのです。何だか、貴方がいくらか私の同國人のやうな氣がします……だから、おしやべりな神父を勘忍して下さい、ね、さうして貴方は、貴方が私のいふことを聽いて下さつたことに對して私の感謝してゐることを、信じて下さい……明日の朝は、何時にお立ちになりますか？ 五時ですか？ よろしい、私は四時半に聖堂に参りませう、さうして貴方がこの生命の糧なしに旅立ちしなければならぬことのない様に、ミサを讀みませう。

さうして善良なる神父は、私に丁寧に夜の挨拶をした。その後で間もなく、私は私の小房の中

に、たつた一人となつた。私は窓の所へ行つた——空は晴れて終つた。修道院の屋根の上には、ラ・エルナの山毛櫨と樅の樹とが、月で薄暗い空氣の中に、黒くその姿を浮き出してゐた。

長い間、私はそこに立ち停つて、外を凝視してゐた。この様に非常に幸に、それでは、羅馬からリエティの谿谷を通り、アシイシとコルトオナとを過ぎてアルエルナの山にまで達した私の巡歴は、愈々終るのだ——グレッツチオの御降誕の馬槽の所から、ラ・エルナの山の上の十字架の聖痕の奇蹟にまで、私を導いて來た巡禮の旅は……

私が見たく願つてゐるものは、尙ほ多く残つてゐた……私はボルゴ・サン・セポルクロを通つてグッピオへ、それからグッピオから「小さき花の國」であるマルク・アンコオナへと、遍歴して行きたかつた。時が然しそれを許さない、さうして私には又、もうそれ以上のものを受け得られない位に、そんなにも多くの、且つ強い印象を私が既に受けた様に思はれる……

私は其故、もう一晩ラ・エルナの山に留つた、さうしてこの第二夜を、私は靜かに眠つた。私が見た所のもの、及び神父サミュエルがこの夜私に語つた所のことは、恰も私の心の奥の戸を開いたかの如くであつた——それは、それを通して光りが輝き、私が思はずもそれが眞晝の光

りに、生命と幸福とに向つて、通じてゐることを知つた所の戸である。……私は、手をその戸の鈎鐵に置くのを躊躇してゐることを、そんなにもはつきり知つてゐる——私は自分の實のことが確かなので、恰も御降誕の夜に子供が輝いてゐる御降誕の樹のある室の闔の所で躊躇し、餘りに大きい歡びを前にして、たゞそろそろとそれに近づいて行くのと同じ様に、尙ほ暫くそこに留つてゐたく思つた……

何となれば、その歡びは私に取つては確かなものであつたから——唯一の眞なる歡び——眞理と愛との内に在ることの歡び……その母からつぎの様な單純な美しい祈りを學び、且つその全生涯それを祈ることをつゞけたのは實にラスキンではなかつたか……「眞理と愛よ、我を捨つる勿れ！」と？ さうして、この祈りを以つては、迷ふことは不可能である、この祈りを以つて、人は確實に生き、且つ靜かに死する、何となれば、正しき道の上に、良善の道の上にゐない何人も、この祈りを祈ることが出来ないからである……

「眞理と愛よ、我を捨つる勿れ！」——祈りは、これら二つの力に向けられてゐなければならぬ。愛を有たない者は、又眞理をも有つことが出来ない、何となれば、彼は絶えず彼自身のも

ののみを探し、且つ見出し、眞理の代りにたゞ誤謬のみを握むからである。さうして、眞理を有つものは、又愛をも有つに違ひない、若しも彼がそれを有たないとすれば、それは彼の眞理が誤謬であるか、又は、それが彼のために眞理となることが出来なかつた事實を、彼がそれに依つて眞に生くる所の眞理、即ち生命の眞理とはなることが出来なかつた事實を意味するか、孰れかである……

「眞理と愛よ、我を捨つる勿れ！」——この純なる祈りの前に、總ての誘惑、總ての不安、總ての疑ひ、總ての憂慮、總ての恐怖及び總ての夜の變化は、避け失せなければならぬ。神は、私たちの意思が愛の下に屈せんとして用意して居り、私たちの思想が眞理の方に向ふことを欲する以上に、何ものをも私たちから要求することは出来ない。それらの二つの最高の實を、明かに且つ純粹に探求することこそ、神が嘉納を以つてそれを見給ふ所の彼の善き意思である、それこそ、常に聽かるゝことの確實なる、祈りである、それこそ、その中に於て人が地上に於ては平和を有ち、且つ彼から奪はるゝことなかるべき、最良の部分を選んだものとして安全に、信頼に満ちて、死に面接し得る所の聖寵のあの状態である……

翌朝早く私は外の霧の中でする鋭い調子のいゝ一叫び聲で眼を醒された。思はず私は、聖フランチェスコの鷹の話を想ひ出した——私は、今日でも鷹がラ・エルナの山の巖の裂け目にその巢を作るといふことをきいて知つてゐる……

四時である。起き上ると間もなく、私は廊下の奥の方に神父サミュエルのがたことと響く木靴の音を聞いた——間もなく、彼は私の扉を叩いて *Benedicamus Domino* ! (我等主を讃へむ!) といふ彼の挨拶をした。頭を水でびしょ濡れにしたまゝ、私は *Deo gratias* ! (神は感謝せられよかし!) と答へた。

その一時間後に、私はアルエルナの山を去つた。神父サミュエルは、修道院から聖堂へ通する戸の所で、私に別れを告げた、さうして今や、私は朝の最初の光りの中に灰色に寂しくそこに横つてゐる高い穹窿のある *Chiesa maggiore* (大聖堂) を通つて、一人で歩いて行つた。私は諸、

の祭壇の上にあるデッラ・ロッピアの作の上に、別れの一瞥を投げた——御昇天、お告げ、幼子イエズスを拜禮せらるゝ愛すべき跪ける聖母などに……それから、私は重い扉を開いて、外の霧の中へ出た。昨日はそれを越えてあんなにも廣い、太陽に明るい展望を有した小さい廣場の周りの胸壁の上から、今日は私は霧より外は何も見なかつた。それは、アペニニ山脈の五月の或る朝といふよりは、冬の霧深い日の丁抹の大ベルト(海峡)の上の渡船の上といった方がいゝ位であつた。

私は、廣場の中央に在るフランチェスコの像の前を過ぎた、それから一昨日、私が滴るばかりに濡れてその前に立つた修道院への入口の戸の傍を、私は扉となつてゐる穹窿の下を通つた、さうして又新たに、その上の *Non est in toto orbe sanctorum* (全世界にこれに優りて聖なる山はなし) といふ記銘を読んだ。それから小鳥の禮拜堂を過ぎ、郵便局のある小さい町を通り、大きな巖の塊と草を食んでゐる小羊の群れのゐる野を横切つて、無限につゞく階段を降つて行つた。私の周囲に於ては、總てが沈黙して寂寥としてゐた。灰色の霧の中には、生牆の露に濡れた枝がくつきり浮び出てゐた。私の背後では、アルエルナの山が全く霧に隠されて終つた、けれど、

上の方の霧の中では、その鐘の音が軽く響いてゐた。

ラ・エルナの山の頂を包んでゐる雲の下に私が終に抜け出たのは、それから半時間程の歩行の後であつた。私は小河がざわざわと流れ、ナイティンゲルが鳴き、煙が住民の家々から登り始めてゐる平地に降りてきた。

アルエルナの山は、然し、この下からでも依然として見えなかつた。

七時には私は *Per la Romagna* (ラ・ロマーニアの方へ) *Per la Verna* (ラ・エルナの方へ) といふ二つの記銘のある石の立つてゐる分岐路に達した。一の廣い谿の向う側には、ビッピエナが高く立つてゐた——白い家や、黒い扁柏オリーブや、二つの灰色の鐘塔や、總てが褐色の山々の間の一の緑の丘の上に横つてゐた。さうしてその塔から明るい鐘の音が響き渡つてきた。

けれど私がビッピエナの市に着くまでには、尙ほ一時間程かゝつた。さうしてそこで始めて私は、アルエルナの山に對して、最後の別れの一瞥を送ることが出来た。市門のすぐ前で、私は立ち停つて後ろを振り返つた——私がこゝから立つて行つた日の様に、私はラ・エルナの山の巨大な山陵が遠く向うの地平線にそゞり立つてゐるのを見た……暗いその頂は、冷たい雲の中に包ま

れてゐた……私は、農夫たちが何故この荒い巖を *vernare* (凍る) といふ動詞から「冬^の山」*La Verna* と呼ぶ様になつたのかを理解した……

然しそれにも拘らず、この冬の山は、如何なる緑の夏の岸邊よりも、熱烈に愛せられた、さうして人間の心の中に於て最も貴きものの一つは、それを眺めた時に、恰も他の人々の心がその故郷を遠くに眺めた時に鼓動する様に鼓動したのである。兄弟マッセオ及び他の兄弟たちの書いた聖フランチェスコの告別の言葉を保存して来たその同じ傳統が、アルエルナの山に對するもう一つの最後の告別について物語つてゐる——それは、人がその中に於て大なる聖人の心が嘯啼して、今にも破るゝに至らんとするのを聴くかの如くに思はれる所の、一の告別の言葉である……

彼の驢馬に跨つて兄弟フランチェスコは、兄弟レオネを伴にしてモンテ・アルコッペ (*Monte Arcoppe*) の山とモンテ・カゼッラの山とを越えて、ボルゴ・サン・セポルクロ (*Borgo San Sepolero*) の市の方へと赴いた。さうして、彼が其處から最後にアルエルナの山を眺めること出来るモンテ・カゼッラの山頂に達した時に、聖フランチェスコはその乗つてゐた灰色の驢馬の頭を振り向けて、過ぎて来た方を眺め回した。

あそこに、彼の生涯の總ての忘れ難い場所の中に於ても最も忘れ難いものである場所が横つてゐた——サン・ダミアアノよりも更に忘れ難く、フォンテ・コロンボよりも尙ほ忘れ難く、ポッヂオ・ブストオネよりも、然りボルティウンコオラよりも更に忘れ難い場所がそこに横つてゐた……そこにその場所は、樹の葉で緑に、縦の樹でうす黒く空に曲折を刻んで、浮ぶ様に横つてゐた——一の煙の雲が、恐らくそこに高く登つてゐた、後に残つた兄弟たちの小房からの煙が……聖フランチェスコは、心を引き締めてそちらを眺めてゐた——一瞬間、恰も彼がもう一度愛する親しい人々の顔を彼の周りに見、且つよく知つてゐる彼等の聲をその耳に聴くかの如く、彼には思はれた……けれど、あゝ！ 彼は彼等からは、遠く隔つてゐたのだ、山と谷とが、彼と彼等との間に横つてゐた、さうして彼は、もう決して二度と、彼等を見ることが出来なかつたのだ……さうして友達や弟子たちのことから、兄弟フランチェスコの考へは、主にして師なるものへ、天の兄弟にして教師なるものへ、愛する基督のもとへ、移つて行つた……殆ど慄へるばかりになつて、フランチェスコは、あの山の上に於て、如何なることが彼に起つたかを、考へた——彼が、アシシシの商人の小さき息子が、ピエトロ・ベルナルドオネとマドンナ・ピカとの子が、嘗ては

彼の故郷の總らゆる世間的の子の中に於ても最も大なる世間的な子であつた所の彼が、今や使徒の如くに自らについてかう言ふことが出来る様になつたことを……「我は主イエズスの聖痕を我が身に帯びたり……」と。おゝ、心を壓しつける計りの奇蹟よ、おゝ、殆ど恐ろしく思はせる程の聖寵よ……

熱い燃える様な涙が、フランチェスコの眼光を盲にした。彼の心は讚美と感謝と、謙遜と溢るばかりの歡喜とで満された。それは恰も、彼が愛の火に依つて滲透せられたかの如くであつた、さうして、その上に於て神が彼のためにあの様に大なる事を爲し給うた山を祝福するために、その火の流が彼の右の手に集注するかの如くであつた。さうして、彼が釘で貫かれた右の手で遠くのラ・エルナの山の上に十字架の記しをした時、彼の心は一の最後の挨拶に、一の最後の掩視に、一の最後の告別にまで融けた……

“A Dio, Monte di Dio, さらば、神の山よ、汝、聖なる山よ、汝、富める山よ、汝、豊かなる山よ、汝、神がそこに來り住むことを好み給ひし山よ。さらば、アルゼルナの山よ——聖父なる神、聖子なる神及び聖靈なる神、汝を祝福し給はむことを！ 安らかに生きよ、されど私は、

もう決して二度と再び、お前を見ることはないであらう！」

それから兄弟フランチェスコは、彼の驢馬の頭を向け直して、兄弟レオネを後に従へながら、黙つてモンテ・カゼッラの山を降つた。その後二年と三日を経て、再びラ・エルナの山を見ることなしに、彼はボルティウンコオラに於てこの世を去つた。

その後、やがて七百年の年月が過ぎ去つた。けれども今、私がビッピエナの市の前に立つて、ずつと遠くの地平線のあたりに、暗黒色のラ・エルナの山がその高低のある山陵を重い雲の中に聳え立たせてゐるのを見る時、恰もその遠い昔の時に私が跣足でフランチェスコ會の修道士の服を着て、オルランド伯の驢馬に乗つてゐるアシインの小さな、驚異すべき人の傍に立つてゐたかのように、モンテ・カゼッラの山の上に於ける彼の遠い時は、生き生きとしたものとなつて私に感ぜられてきた——恰も私が、彼の釘で貫かれた手が掩視の十字架を切るために挙げられるのを私自身の眼を以つて見たかのように、さうして私が今も尙ほ、私の耳を以つて、彼の悲しい言葉の優しい聲音を聞くことが出来るかの様に……

“A Dio, Monte Alverna……non ci vedremo più!”(ならば、アルエルナの山よ……私たち

は、もう決して相見ることはないであらう!)といふ聲を。

結語

處である時、フアレロオネの兄弟ジャコボが兄弟マッセオに向つて、彼が何故その歡ぶ仕方を變へないのか、さうして何故、一の新しい歌を唱はないのかといつて、訊ねた。すると兄弟マッセオは、それに對して、大なる歡びを以つて答へた……「何故ならば、たつた一つのことによる歡びを見出してゐる者は、その一つのことの歌より外には、唱ふべきではないのだから」と。

（「イライオレツタイ小なき花」第三十二章）

第八章の第一の規則についての訂正

こゝに記述せられてゐる推論は、争ひ難いものではない。フランチェスコがフォンテ・コロンの山に於て書いた規則は勿論、羅馬に依つて是認せられたその終決的の形式に於ての千二百二十三年の規則と同一ではな^く。Speculum perfectionis（完全の鏡）の第一章の中に記され傳説的に修飾せられたフランチェスコとエリアの黨派との間の事件にも拘らず、この後のものが勝つたのである。フランチェスコに依つて書かれた規則は、僅かにその變改せられたる形に於てのみ、教皇の同意を得たに過ぎない。このことは、規則の第七章と、その第七章の草案を包含するエリアに對する聖フランチェスコの手紙（Opusc. S. P. Francis. Quaracchi 1904, p. 108—110）との間の一の比較に依つて非常に明瞭になつてくる。ランプがいつた様に（Lempp, Frère Elie de Cortone, Paris 1901, p. 51）……「フランチェスコの元の草案がその基礎になつてゐる、けれど、それは單に正確にせられ短かくせられたのみならず、たとへ誇張せられた様に思はれると

しても而もそんなにもフランチェスコ的であつた所の、その元の柔和さを失つてゐる。故に上述の場所に於てこの書の中にポオル・サバティエに對してなされた所の、フォンテ・コロンボの規則と千二百二十三年の規則との間に私が認めた同一性に根據する反對は、右の理由に従つて除かるべきであり、且つ寧ろなされなかつた方がよかつたのである。

一九〇五年

J. J.

千九百二十九年十月二十四日

裾野の不二農園

聖フィリツポ寮に於て譯了

昭和五年八月二日印
昭和五年八月六日第一刷發行

巡禮の書
定價貳圓

(大森社本)



譯者 山村 靜一

發行者 岩波 茂雄
東京市神田區一ツ橋通町三番地

印刷者 白井 赫太郎
東京市神田區錦町三丁目十七番地

精興社印刷

發行所

東京市神田區
一ツ橋通町三番地

岩波書店

電話(53) 三三〇一(八番) 二二八六番
九段(53) 三三〇二(九番) 二二八六番
新橋口 三三〇三(小賣部専用) 二二八六番
東京 二六二四〇番

岩波書店刊行宗教書

東京帝國大學カトリック研究会編
カトリック研究 第一輯

冊別一九四頁 定價一圓 送料寄附十八錢

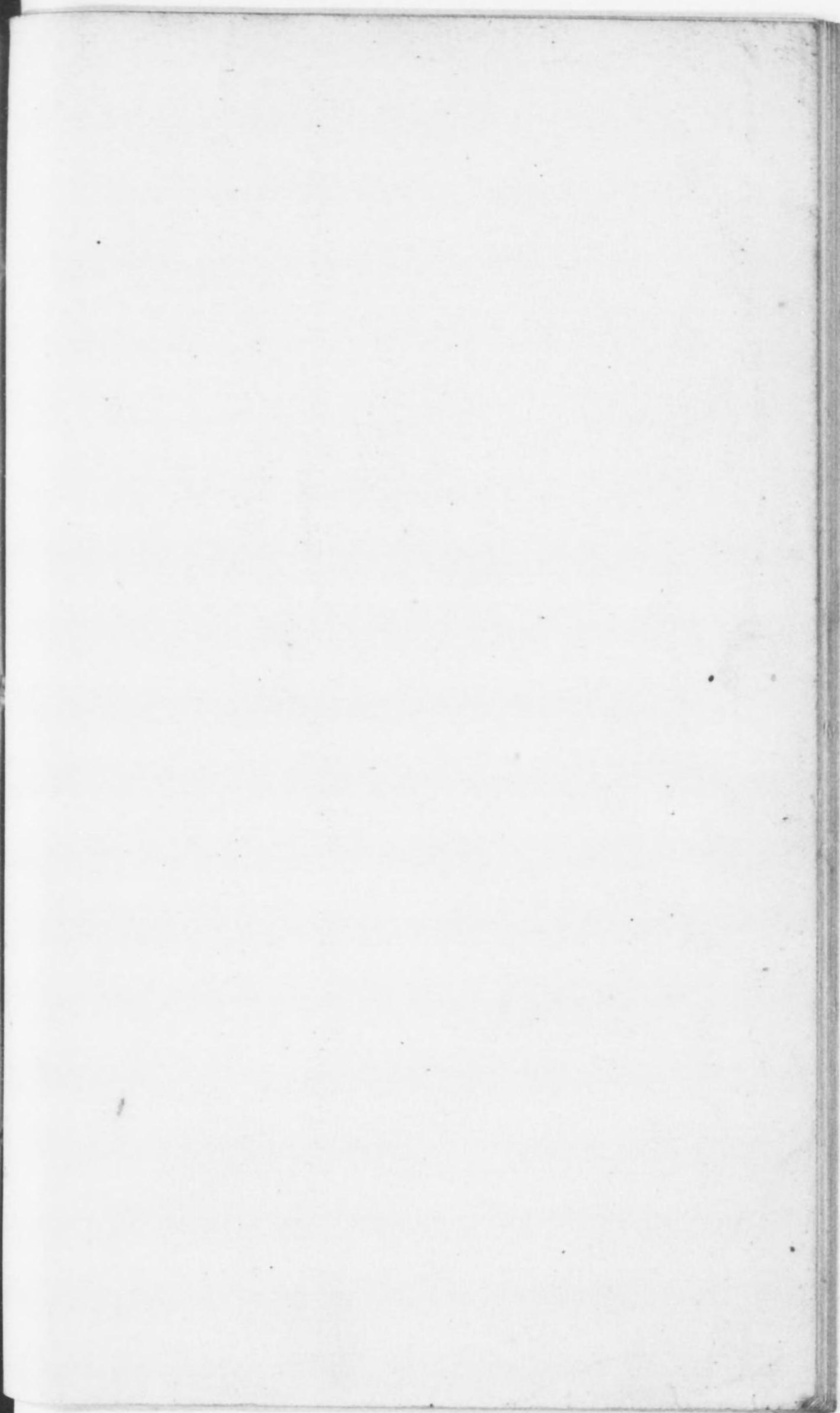
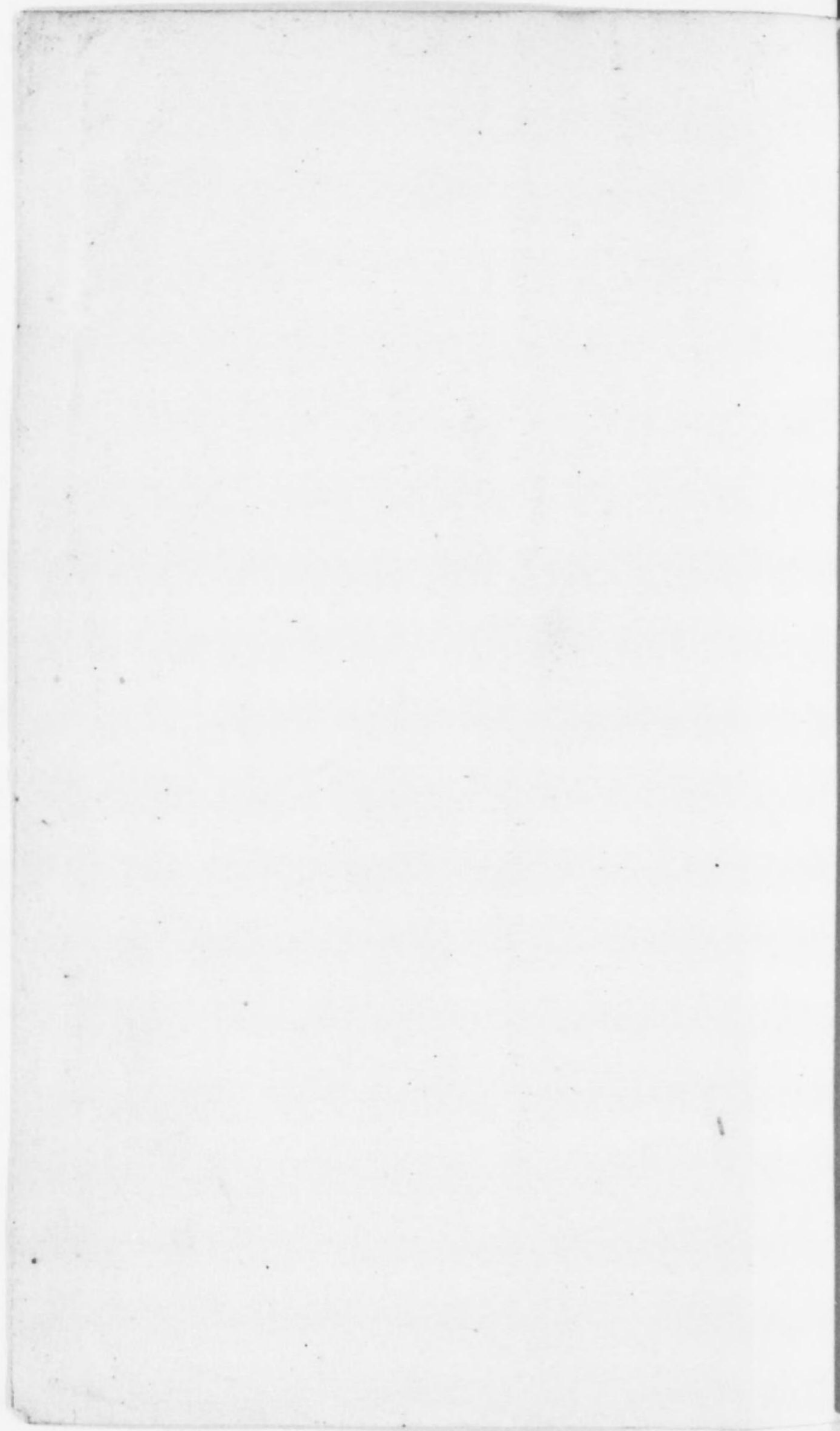
- アウグスチン・ベア 聖書高等批評と最近考古學的發見
 田中耕太郎 自然法の過去及び其の現代的意義
 小林珍雄 譯 Immortale Dei
 大澤 章 ラテラノ條約に於ける聖座とヴェイカ
 ノ市國家の地位
 アンリ・アンベルクロード ポール・ヴェルレーヌの「智慧」に就
 て
 岩下壯一 イエズスと律法
 デル・レ オックスフォードに於けるカトリック
 教
 ヘンリ・トリストラム ニューマンとマッシュ・アーノルド

岩波書店刊行宗教書

矢吹慶輝著	三階教の研究	定價十圓八錢 送料寄附五十四錢
紀平正美著	無門關解釋	定價二圓八十錢 送料寄附廿七錢
金子大榮著	佛教概論	定價二圓八十錢 送料寄附廿七錢
金子大榮著	彼岸の世界	定價二圓三十錢 送料寄附廿七錢
金子大榮著	教行信證の概要	定價一圓六十錢 送料寄附十八錢
和辻哲郎著	原始佛教の實踐哲學	定價三圓二十錢 送料寄附廿七錢
和辻哲郎著	原始基督教の文化史的意義	定價二圓廿七錢 送料寄附廿七錢
内村鑑三著	基督再臨問題講演集	定價七十五錢 送料六錢
内村鑑三著	信仰日記 附歌々ろ	定價一圓三十錢 送料寄附十六錢
内村鑑三著	對談 獨語集	定價一圓十六錢 送料寄附十六錢
内村鑑三著	ルーテル傳講演集	定價一圓三十錢 送料寄附十八錢
藤井武著	ルーテルの生涯及び事業	定價一圓八十錢 送料寄附十八錢

目書教宗行刊店書波岩

高寺 野澤 正智 了治 譯	石原謙・山谷省吾 著	ハインリッヒ	三谷隆正著	林達夫譯	アセツト著	藤井武著	藤井武著	藤井武著	藤井武著	藤井武著	藤井武著	藤井武著	藤井武著	藤井武著
キング	原	信	信	イ	イ	聖書より見たる日本	イエスの生涯とその人格	聖書の結婚觀	沙漠は番紅花の如く	創造	人生のうた	永遠の希望	新	新
の發達	基督教	の論理	の論理	エ	エ	日本	人格	觀	如く	造	た	望	生	生
定書價 三十七錢	品切	定書價 四十二錢	定書價 四十八錢	品切	品切	定書價 四十八錢	定書價 四十八錢	定書價 四十八錢	定書價 四十八錢	品切	定書價 四十八錢	定書價 四十八錢	定書價 四十八錢	定書價 四十八錢



終

